多様な場面の判断力磨く

大日本ダイヤコンサルタント
執行役員関東支社長
大貝　和也氏

地元の北九州で若戸大橋や建設中の関門橋などを見て育ち、そのスケールの大きさにかっこよさを感じ、将来は橋を造る仕事に携わりたいと思いました。施工よりも設計の方が事業全体が分かって面白いのではないかと考え、当社に入社しました。

新人研修後の配属先は大阪支社の橋梁設計の部署。本州四国連絡橋などの大規模橋梁にも憧れはありましたが、いきなり大きな案件だと自分が何をやっているかも分からず、埋もれてしまうのではないかという懸念を抱きました。最初は適度な規模の案件からじっくり経験を積み上げるのが自分にとってはいいのではないか。そうした考えを会社側に伝え、希望を受け入れてもらえました。

まずは単純桁・短スパンといった一般的な道路橋の建設に携わることに。専門用語もよく分からず、分からないことは何でも何度も先輩に聞きました。自分の中で納得、理解するまで同じような質問を繰り返しても、我慢強くとことん付き合って教えてもらえたのはありがたかったです。

設計、施工だけでなく、載荷試験による検証作業に関われたのは、単に設計するだけでは分からない技術的なことをより深く知る上で貴重な経験となりました。別の案件でもコンクリート関連の試験で材料などの重要性を学ぶことができ、新人時代にこうした試験や実験を通じて設計する上で着目すべきポイントに気付けたことは良かったです。

発注者や施工者とのコミュニケーションの取り方も勉強になりました。技術だけでなく、人との付き合い方がすごく大切な仕事なのだと実感しました。

3年目以降に担当した中国地方の高規格道路での山岳橋梁は苦労しました。山を登り、川に入りながら周辺の地形や環境を見て回り、現場状況を確認。1期線の計画に当たり、2期線のことを考慮しながら掘削土量をいかに抑えるか、斜面の中でできるだけ造りやすくするにはどうすればいいか。考えることが多く、きつい仕事でしたが、技術者として成長できたと思います。

入社10年目に発生した阪神・淡路大震災は橋梁の設計思想や考え方が大きく変わる転機となり、被害の大きさと合わせて衝撃を受けました。震災前後に関わった四国の高速道路建設事業は、安全性を高めるために検討を重ねていろいろ取り組んだ思い出深い仕事の一つ。今回の能登半島地震でも道路などインフラの重要性を改めて感じました。

入社10年目ごろ。岐阜県内の道路橋建設現場で（前列右端）

技術者にとって自分のベースとなる技術を持った上で、経験を積みながらさまざまな場面での判断力を磨くことが大切だと思います。複雑化する社会では課題解決の方法も一つではありません。若い世代にはさまざまなことに挑戦しながら幅広い知識を得て、多様化する社会課題に臨んでもらいたいです。

（おおがい・かずや）1985年九州工業大学大学院工学研究科開発土木工学専攻修了、大日本コンサルタント（現大日本ダイヤコンサルタント）入社。技術統括センター長、大阪支社長などを経て2023年から現職。福岡県出身、63歳。